

おとなたちのおもちや03 白藤杏○



sircle:THE HYPERMAN



「腹が減るんだから仕方ないだろ!!」
「でも君が食べてるのはお店の……!!」
杏◎の普段の暴食具合に危機感を持った数人の幹部が
杏◎を叱責するが、うちが明かない。
最終手段として、催眠術を用いて杏◎の食欲を減らせれば
という提案がなされた。
半信半疑な杏◎だが、それで解決するならと従うことに。
精神構造が単純な杏◎はいとも簡単に催眠術にかかった。
しかし幹部たちには、実のところ別の目的があった。

日々のほとんど食料を消費していた杏◎のもとへ
各店の店長を集めて研修会をやるという連絡が入った。
そして出張として研修会場へと赴いた杏◎だったが
何故か彼女だけ別室へと案内されることに。

「それじゃあ接客の基本を教えていくよ」
「あ、ああ」
杏〇は、男たちの言葉が全て正しいことであると
思いこむ催眠にかかっていた。
深層の部分では何か恥ずかしいことをやらされて
いる意識があつたが、今の杏〇には何が恥ずかしい
のかもわからない。
「お客様に下着を見せてほしいと言われたら、素直に
従うようにね」
「わかっただ」



「それじゃあ接客の基本を教えていくよ」
「あ、ああ」
杏〇は、男たちの言葉が全て正しいことであると
思いこむ催眠にかかっていた。
深層の部分では何か恥ずかしいことをやらされて
いる意識があつたが、今の杏〇には何が恥ずかしい
のかもわからない。
「お客様に下着を見せてほしいと言われたら、素直に
従うようにね」
「わかっただ」



「味見をお願いされたら、快くお受けするようには」
「んっ…あ、ああ」
男たちは杏〇の身体を遠慮なく舐め回し、啜った。
ジュルルルル…ズソソ…レロツツ…ヌチヤ
音を立てて局部を舐められる経験など、杏〇の
記憶上には無かった。
しかし、慣れない経験にも関わらず杏〇の膣からは
蜜が次から次へと溢れ出した。



「味見をお願いされたら、快くお受けするようには」
「んっ…あ、ああ」
男たちは杏〇の身体を遠慮なく舐め回し、啜った。
ジュルルルル…ズソソ…レロツツ…ヌチヤ
音を立てて局部を舐められる経験など、杏〇の
記憶上には無かった。
しかし、慣れない経験にも関わらず杏〇の膣からは
蜜が次から次へと溢れ出した。





男たちによる杏○の味見は続く。
「キスをお願いされたり、それにも応じて
あげてください」
「んむ〜んむ〜」
「もつと〜んむ〜唾液をいただけますか」
杏○が生きてきてほとんど聞く機会など
無い言葉だが、おとなしく従うほかない。



男たちによる杏〇の味見は続く。
「キスをお願いされたり、それにも応じて
あげてください」
「んむ〜んむ〜」
「もつと〜んむ〜唾液をいただけますか」
杏〇が生きてきてほとんど聞く機会など
無い言葉だが、おとなしく従うほかない。

「オシッコを飲ませて欲しいというお客様が
いらつしやうたら!」
「そんなのいるのが...?」
「もしものために練習しまじょうか」
「あ、ああ」
杏〇は男の顔に跨るよう促され、その回の中へ
放尿した。
男はゴクゴクと喉を鳴らし、杏〇のものを飲み干した。



「オシッコを飲ませて欲しいというお客様が
いらつしやうたら!」
「そんなのいるのが...?」
「もしものために練習しましょうか」
「あ、ああ」
杏〇は男の顔に跨るよう促され、その回の中へ
放尿した。
男はゴクゴクと喉を鳴らし、杏〇のものを飲み干した。



「オモチャを使ってみたい」という
お客様がいたら」
「オモ……チャ？」
杏〇は何のことやらと首を傾げるが
男はバイブ取り出し、杏〇の膣内へと
押し込んだ。
「あっ、あっ！」
バイブのひだが杏〇の膣壁をつかまえ
分泌される体液がかき出されて床の絨毯に
染みを作った。



「オモチャを使ってみたい」という
お客様がいたら」
「オモ……チャ？」
杏〇は何のことやらと首を傾げるが
男はバイブ取り出し、杏〇の膣内へと
押し込んだ。
「あっあっ！」
バイブのひだが杏〇の膣壁をつかまえ
分泌される体液がかき出されて床の絨毯に
染みを作った。



「チンポを舐めてほしいと言われたら」
「舐める…のか？」
「わかつてるじゃないですか、とても良いですよ」
杏〇は男のモノを懸命に舐め、男も杏〇の
局部を舐め回した。
男は杏〇の局部に顔を押し付け、それを堪能した。



「チンポを舐めてほしいと言われたら」
「舐める…のか？」
「わかつてるじゃないですか、とても良いですよ」
杏〇は男のモノを懸命に舐め、男も杏〇の
局部を舐め回した。
男は杏〇の局部に顔を押し付け、それを堪能した。






「排尿を見せてほしいと言われたら
見せてあげてください」
「今度は見せるのか」
「先ほど飲み物に利尿剤を混ぜておきましたので
そろそろしたくなってくるんじゃないですか？」
「そういえば、先ほど排尿したにも関わらず
杏〇の膀胱にはもう尿が満たされたのが
わかった。尿道を刺激すると、勢いよく尿が
噴き出した。」



「排尿を見せてほしいと言われたら
見せてあげてください」
「今度は見せるのか」
「先ほど飲み物に利尿剤を混ぜておきましたので
そろそろしたくなってくるんじゃないですか？」
「そういえば、先ほど排尿したにも関わらず
杏〇の膀胱にはもう尿が満たされたのが
わかった。尿道を刺激すると、勢いよく尿が
噴き出した。」

顔面騎乗を要求され、男の顔に跨る杏。口では男たちの陰茎への奉仕をさせられた。やり方がわからないなりに懸命に肉棒を舐め、男たちは遠慮なしに口内へ精液を流し込み続ける。「さちんと飲んでくださいねー」「ん…んむ」



顔面騎乗を要求され、男の顔に跨る杏○。
口では男たちの陰茎への奉仕をさせられた。
やり方がわからないなりに懸命に肉棒を
舐め、男たちは遠慮なしに口内へ精液を
流し込み続ける。
「さちんと飲んでくださいねー」
「ん…んむ」




「我々の精液をいっばい味わってもらいましょうか」
男たちは杏〇の掌に精液を大量に出し、それを
杏〇に啜らせた。
「おいしいですか？」
「ん〜ん〜ん〜飲みにくい〜な」
ジュル：ジュル：と音を立てながら、杏〇はゆっくりと
それを飲み干した。


「我々の精液をいっぱい味わってもらいましょうか」
男たちは杏○の掌に精液を大量に出し、それを
杏○に囁かせた。
「おいしいですか？」
「んんんくく…飲みにくい…な」
ジュル：ジュル…と音を立てながら、杏○はゆっくりと
それを飲み干した。

「膣の具合を聞かれたら、素直に使わせるように」
そう言つて男は、ぐちよぐちよに濡れた杏〇の膣の
穴に自分の陰茎を突き入れた。
「口が空いていたら、なるべく別の人のモノも奉仕
してあげてくださいいね」
「んっんっんっ！」
杏〇はおとなしく男の精液を膣内に受け入れ続けた。





「膣の具合を聞かれたら、素直に使わせるように」
そう言つて男は、ぐちよぐちよに濡れた杏〇の膣の
穴に自分の陰茎を突き入れた。
「口が空いていたら、なるべく別の人のモノも奉仕
してあげてくださいいなね」
「んっんっんっ！」
杏〇はおとなしく男の精液を膣内に受け入れ続けた。



臍と尻穴に同時に男たちの肉棒を挿入された杏◎。
「ちよつと...苦しい...はあ...はあ...」
杏◎は苦しがるが男たちは勝手を知るように
気にせず肉棒の出し入れを続けた。
「こんどん良くなるから大丈夫だよ、特に君は」
ただ励まされているのか、それとも...
しかし杏◎にはそんなことを考える余裕はなかった。

臍と尻穴に同時に男たちの肉棒を挿入された杏◎。
「ちよつと...苦しい...はあ...はあ...」
杏◎は苦しがるが男たちは勝手を知るように
気にせず肉棒の出し入れを続けた。
「こんどん良くなるから大丈夫だよ、特に君は」
ただ励まされているのか、それとも...
しかし杏◎にはそんなことを考える余裕はなかった。



電動マッサージ機を股間に押し付けられる杏○。
「オモチャの種類も色々あるからね、何が出てきても
きちんと対応するように」
「うっ……ぐっ……うっ……うっ……！」
杏○の膣から粘性の体液が次々流れ出し、床にも
男たちにもその匂いを染みつかせる。



電動マッサージ機を股間に押し付けられる杏○。
「オモチャの種類も色々あるからね、何が出てきても
きちんと対応するように」
「うっ……ぐっ……うっ……うっ……！」
杏○の膣から粘性の体液が次々流れ出し、床にも
男たちにもその匂いを染みつかせる。





「精液便所になる練習もしておこうね」
 拘束具によつて身動きが取れない杏〇を
 数人の男たちが代わる代わるに犯していく。
 「はあはあはあはあはあはあ」
 杏〇はずいぶんと疲れた様子を見せていたが
 男たちは構わず杏〇の穴を攻め続けた。

正 正 正
 正 正 正

正 正 正
 正 正 正
 正 正 正

「精液便所になる練習もしておこうね」
拘束具によつて身動きが取れない杏○を
数人の男たちが代わる代わるに犯して行く。
「はあはあはあはあはあ」
杏○はずいぶんと疲れた様子を見せていたが
男たちは構わず杏○の穴を攻め続けた。

「お客様に記念撮影を求められたら、快く応じてくださいね」
「ほらピースして!!」
前後の穴にオモチャを入れられ、穴の拡張がされていた。
そしてすでに、杏〇の意識は無いに等しい状態だった。

「腹減ったな...」
面倒な研修会は終わった。(覚えていないが)彼女が食事を求めて、日常へと戻っていくのであった。
次に杏〇が気付いた時、出張のために予約していたビジネスホテルの二室にいた。そして日付も変わっており、すでに朝だった。研修会では何をやってたのかまるで思い出せないが杏〇にとってそんなことは些細な問題であった。



「お客様に記念撮影を求められたら、快く応じてくださいね」
「ほらピースして!!」
前後の穴にオモチャを入れられ、穴の拡張がされていた。
そしてすでに、杏〇の意識は無いに等しい状態だった。

「腹減ったな...」
面倒な研修会は終わった。覚えていないが、彼女は食事を求めて、日常へと戻っていくのであった。
次に杏〇が気付いた時、出張のために予約していたビジネスホテルの二室にいた。そして日付も変わっており、すでに朝だった。研修会では何をやってたのかまるで思い出せないが、杏〇にとってそんなことは些細な問題であった。





「腹が減るんだから仕方ないだろ！」
「でも君が食べてるのはお店の……」
杏◎の普段の暴食具合に危機感を持った数人の幹部が
杏◎を叱責するが、うちが明かない。
最終手段として、催眠術を用いて杏◎の食欲を減らせれば
という提案がなされた。
半信半疑な杏◎だが、それで解決するならと従うことに。
精神構造が単純な杏◎はいとも簡単に催眠術にかかった。
しかし幹部たちには、実のところ別の目的があった。

日々のほとんど食料を消費していた杏◎のもとへ
各店の店長を集めて研修会をやるという連絡が入った。
そして出張として研修会場へと赴いた杏◎だったが
何故か彼女だけ別室へと案内されることに。

「それじゃあ接客の基本を教えていくよ」
「あ、ああ」
杏〇は、男たちの言葉が全て正しいことであると
思いこむ催眠にかかっていた。
深層の部分では何か恥ずかしいことをやらされて
いる意識があつたが、今の杏〇には何が恥ずかしい
のかもわからない。
「お客様に下着を見せてほしいと言われたら、素直に
従うようにね」
「わかっただ」



「それじゃあ接客の基本を教えていくよ」
「あ、ああ」
杏〇は、男たちの言葉が全て正しいことであると
思いこむ催眠にかかっていた。
深層の部分では何か恥ずかしいことをやらされて
いる意識があつたが、今の杏〇には何が恥ずかしい
のかもわからない。
「お客様に下着を見せてほしいと言われたら、素直に
従うようにね」
「わかっただ」



「味見をお願いされたら、快くお受けするよ」
「んっ…あ、ああ」
男たちは杏〇の身体を遠慮なく舐め回し、啜った。
ジュルルルル…ズソソ…レロツツ…ヌチヤ
音を立てて局部を舐められる経験など、杏〇の
記憶上には無かった。
しかし、慣れない経験にも関わらず杏〇の膣からは
蜜が次から次へと溢れ出した。



「味見をお願いされたら、快くお受けするようには」
「んっ…あ、ああ」
男たちは杏〇の身体を遠慮なく舐め回し、啜った。
ジュルルルル…ズソソ…レロツツ…ヌチヤ
音を立てて局部を舐められる経験など、杏〇の
記憶上には無かった。
しかし、慣れない経験にも関わらず杏〇の膣からは
蜜が次から次へと溢れ出した。





男たちによる杏〇の味見は続く。
「キスをお願いされたり、それにも応じて
あげてください」
「んむ〜んむ〜」
「もつと〜んむ〜唾液をいただけますか」
杏〇が生きてきてほとんど聞く機会など
無い言葉だが、おとなしく従うほかない。



男たちによる杏〇の味見は続く。
「キスをお願いされたり、それにも応じて
あげてください」
「んむ……んむ」
「もつと……んむ、唾液をいただけますか」
杏〇が生きてきてほとんど聞く機会など
無い言葉だが、おとなしく従うほかない。

「オシッコを飲ませて欲しいというお客様が
いらつしやうたら!」
「そんなのいるのが...?」
「もしものために練習しましよつか」
「あ、ああ」
杏〇は男の顔に跨るよう促され、その回の中へ
放尿した。
男はゴクゴクと喉を鳴らし、杏〇のものを飲み干した。



「オシッコを飲ませて欲しいというお客様が
いらつしやうたら!」
「そんなのいるのが...?」
「もしものために練習しまじょうか」
「あ、ああ」
杏〇は男の顔に跨るよう促され、その回の中へ
放尿した。
男はゴクゴクと喉を鳴らし、杏〇のものを飲み干した。



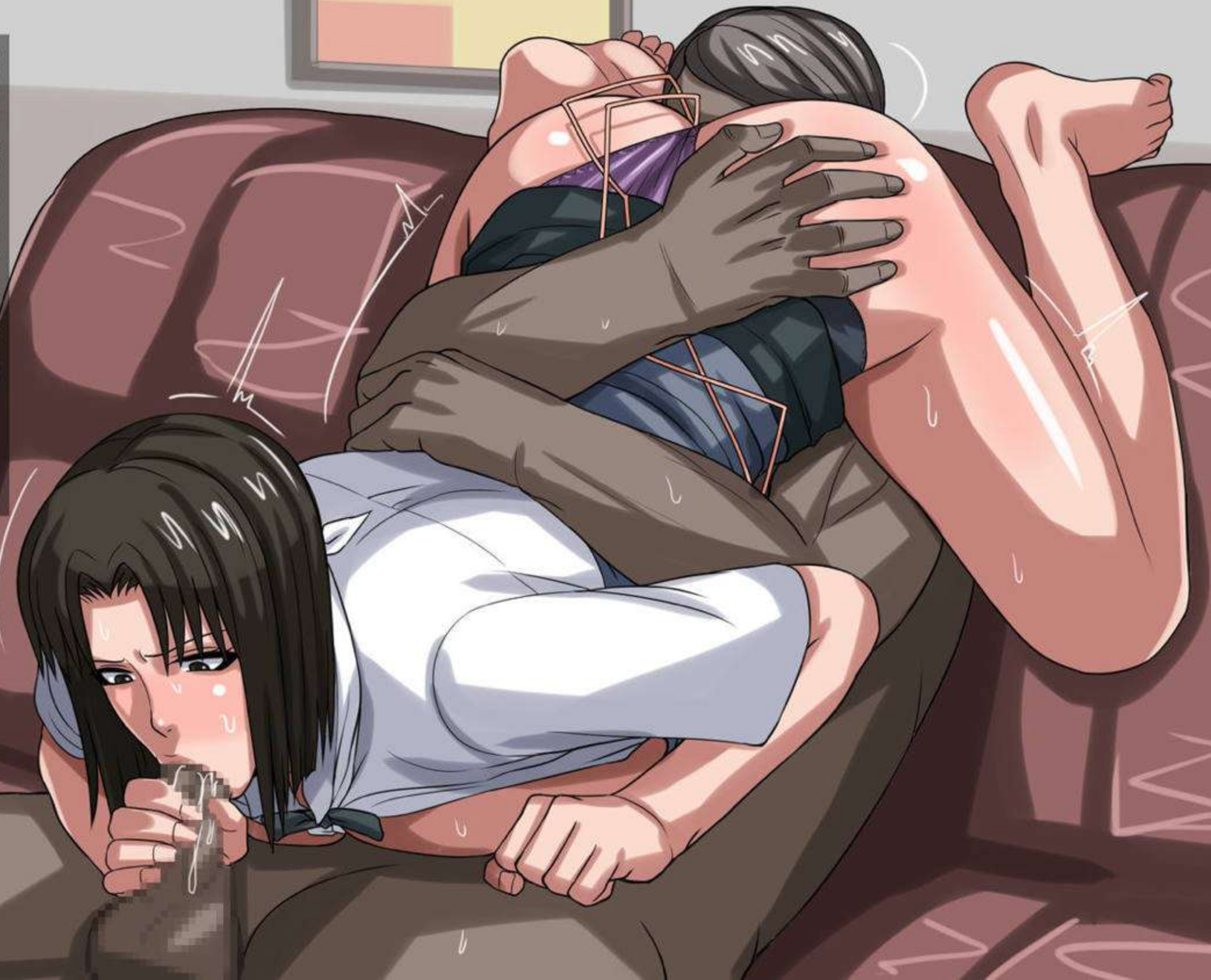
「オモチャを使ってみたい」という
お客様がいたら」
「オモ……チャ？」
杏〇は何のことやらと首を傾げるが
男はバイブ取り出し、杏〇の膣内へと
押し込んだ。
「あっ、あっ！」
バイブのひだが杏〇の膣壁をつかまえ
分泌される体液がかき出されて床の絨毯に
染みを作った。



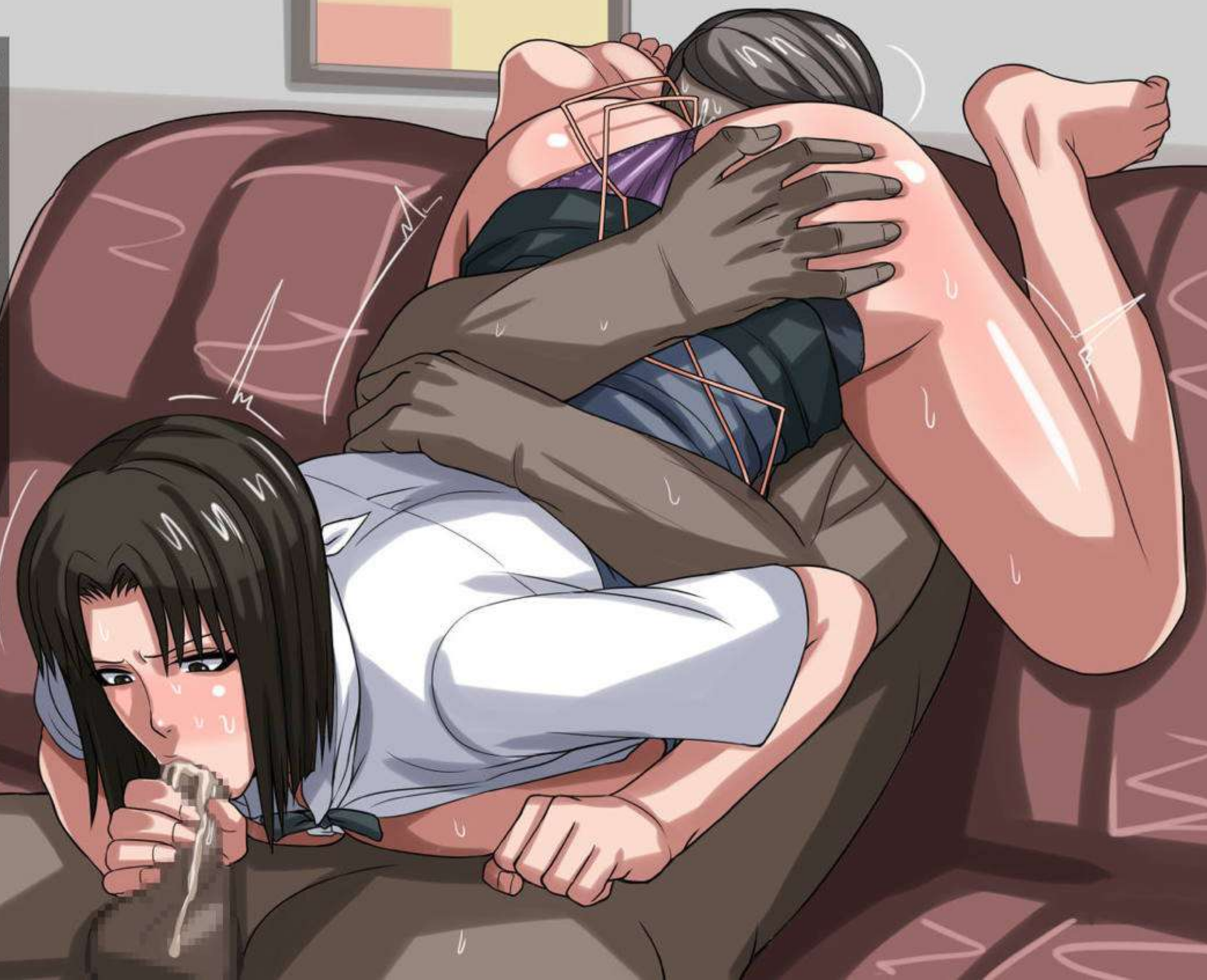
「オモチャを使ってみたい」という
お客様がいたら」
「オモ……チャ？」
杏〇は何のことやらと首を傾げるが
男はバイブ取り出し、杏〇の膣内へと
押し込んだ。
「あっ、あっ！」
バイブのひだが杏〇の膣壁をつかまえ
分泌される体液がかき出されて床の絨毯に
染みを作った。



「チンポを舐めてほしいと言われたら」
「舐める…のか？」
「わかつてるじゃないですか、とても良いですよ」
杏〇は男のモノを懸命に舐め、男も杏〇の
局部を舐め回した。
男は杏〇の局部に顔を押し付け、それを堪能した。



「チンポを舐めてほしいと言われたら」
「舐める…のか？」
「わかつてるじゃないですか、とても良いですよ」
杏〇は男のモノを懸命に舐め、男も杏〇の
局部を舐め回した。
男は杏〇の局部に顔を押し付け、それを堪能した。






「排尿を見せてほしいと言われたら
見せてあげてください」
「今度は見せるのか」
「先ほど飲み物に利尿剤を混ぜておきましたので
そろそろしたくなってくるんじゃないですか？」
「そういえば、先ほど排尿したにも関わらず
杏〇の膀胱にはもう尿が満たされたのが
わかった。尿道を刺激すると、勢いよく尿が
噴き出した。」



「排尿を見せてほしいと言われたら
見せてあげてください」
「今度は見せるのか」
「先ほど飲み物に利尿剤を混ぜておきましたので
そろそろしたくなってくるんじゃないですか？」
「そういえば、先ほど排尿したにも関わらず
杏〇の膀胱にはもう尿が満たされたのが
わかった。尿道を刺激すると、勢いよく尿が
噴き出した。」



顔面騎乗を要求され、男の顔に跨る杏○。
口では男たちの陰茎への奉仕をさせられた。
やり方がわからないなりに懸命に肉棒を
舐め、男たちは遠慮なしに口内へ精液を
流し込み続ける。
「さちんと飲んでくださいねー」
「ん…んむ」


顔面騎乗を要求され、男の顔に跨る杏。口では男たちの陰茎への奉仕をさせられた。やり方がわからないなりに懸命に肉棒を舐め、男たちは遠慮なしに口内へ精液を流し込み続ける。「さちんと飲んでくださいねー」「ん…んむ」





「我々の精液をいつばい味わつてもらいましようか」
男たちは杏〇の掌に精液を大量に出して、それを
杏〇に嚙らせた。
「おいしいですか？」
「んんんんんく、飲みにくいな」
ジュル：ジュル：と音を立てながら、杏〇はゆっくりと
それを飲み干した。

「我々の精液をいっばい味わってもらいましよるか」
男たちは杏〇の掌に精液を大量に出してそれを
杏〇に囁かせた。
「おいしいですか？」
「ん〜ん〜く〜飲みにくい〜な」
「ジュル〜ジュル〜と音を立てながら、杏〇はゆっくと
それを飲み干した。」




「膣の具合を聞かれたら、素直に使わせるように」
そう言つて男は、ぐちよぐちよに濡れた杏〇の膣の
穴に自分の陰茎を突き入れた。
「口が空いていたら、なるべく別の人のモノも奉仕
してあげてくださいいね」
「んっんっんっ！」
杏〇はおとなしく男の精液を膣内に受け入れ続けた。

「膣の具合を聞かれたら、素直に使わせるように」
そう言つて男は、ぐちよぐちよに濡れた杏〇の膣の
穴に自分の陰茎を突き入れた。
「口が空いていたら、なるべく別の人のモノも奉仕
してあげてくださいね」
「んっんっんっ！」
杏〇はおとなしく男の精液を膣内に受け入れ続けた。



臍と尻穴に同時に男たちの肉棒を挿入された杏◎。
「ちよつと…苦しい…はあ…はあ…」
杏◎は苦しがるが男たちは勝手を知るように
気にせず肉棒の出し入れを続けた。
「こんどん良くなるから大丈夫だよ、特に君は」
ただ励まされているのか、それとも…
しかし杏◎にはそんなことを考える余裕はなかった。





臍と尻穴に同時に男たちの肉棒を挿入された杏◎。
「ちよつと...苦しい...はあ...はあ...」
杏◎は苦しがるが男たちは勝手を知るように
気にせず肉棒の出し入れを続けた。
「こんどん良くなるから大丈夫だよ、特に君は」
ただ励まされているのか、それとも...
しかし杏◎にはそんなことを考える余裕はなかった。

電動マッサージ機を股間に押し付けられる杏○。
「オモチャの種類も色々あるからね、何が出てきても
きちんと対応するように!」
「うっ……ぐっ……うっ……うっ……!」
杏○の膣から粘性の体液が次々流れ出し、床にも
男たちにもその匂いを染みつかせる。



電動マツサージ機を股間に押し付けられる杏○。
「オモチャの種類も色々あるからね、何が出てきても
きちんと対応するように」
「うっ……ぐっ……うっ……うっ……！」
杏○の膣から粘性の体液が次々流れ出し、床にも
男たちにもその匂いを染みつかせる。





「精液便所になる練習もしておこうね」
拘束具によつて身動きが取れない杏〇を
数人の男たちが代わる代わるに犯して行く。
「はあはあはあはあ」
杏〇はずいぶんと疲れた様子を見せていたが
男たちは構わず杏〇の穴を攻め続けた。

「お客様に記念撮影を求められたら、快く応じてくださいね」
「ほらピースして!!」
前後の穴にオモチャを入れられ、穴の拡張がされていた。
そしてすでに、杏〇の意識は無いに等しい状態だった。

「腹減ったな...」
面倒な研修会は終わった。(覚えていないが)彼女が食事を求めて、日常へと戻っていくのであった。
次に杏〇が気付いた時、出張のために予約していたビジネスホテルの二室にいた。そして日付も変わっており、すでに朝だった。研修会では何をやってたのかまるで思い出せないが杏〇にとってそんなことは些細な問題であった。



「お客様に記念撮影を求められたら、快く応じてくださいね」
「ほらピースして!!」
前後の穴にオモチャを入れられ、穴の拡張がされていた。
そしてすでに、杏〇の意識は無いに等しい状態だった。

「腹減ったな...」
面倒な研修会は終わった。覚えていないが、彼女は食事を求めて、日常へと戻っていくのであった。
次に杏〇が気付いた時、出張のために予約していたビジネスホテルの二室にいた。そして日付も変わっており、すでに朝だった。研修会では何をやってたのかまるで思い出せないが、杏〇にとってそんなことは些細な問題であった。



REC



「腹が減るんだから仕方ないだろ！」
「でも君が食べてるのはお店の……」
杏◎の普段の暴食具合に危機感を持った数人の幹部が
杏◎を叱責するが、うちが明かない。
最終手段として、催眠術を用いて杏◎の食欲を減らせれば
という提案がなされた。
半信半疑な杏◎だが、それで解決するならと従うことに。
精神構造が単純な杏◎はいとも簡単に催眠術にかかった。
しかし幹部たちには、実のところ別の目的があった。

日々のほとんど食料を消費していた杏◎のもとへ
各店の店長を集めて研修会をやるという連絡が入った。
そして出張として研修会場へと赴いた杏◎だったが
何故か彼女だけ別室へと案内されることに。

HD

AUTO

「それじゃあ接客の基本を教えていくよ」
「あ、ああ」
杏〇は、男たちの言葉が全て正しいことであると
思いこむ催眠にかかっていた。
深層の部分では何か恥ずかしいことをやらされて
いる意識があったが、今の杏〇には何が恥ずかしい
のかもわからない。
「お客様に下着を見せてほしいと言われたら、素直に
従うようにね」
「わかっただ」



HD
AUTO



「それじゃあ接客の基本を教えていくよ」
「あ、ああ」
杏〇は、男たちの言葉が全て正しいことであると
思いこむ催眠にかかっていた。
深層の部分では何か恥ずかしいことをやらされて
いる意識があったが、今の杏〇には何が恥ずかしい
のかもわからない。
「お客様に下着を見せてほしいと言われたら、素直に
従うようにね」
「わかっただ」



HD
AUTO



「味見をお願いされたら、快くお受けするようだよ」
「んっ…あ、ああ」
男たちは杏〇の身体を遠慮なく舐め回し、啜った。
ジュルルルル…ズンズン…レロツツ…ヌチャヤ
音を立てて局部を舐められる経験など、杏〇の
記憶上には無かった。
しかし、慣れない経験にも関わらず杏〇の膣からは
蜜が次から次へと溢れ出した。



「味見をお願いされたら、快くお受けするようだよ」
「んっ…あ、ああ」
男たちは杏〇の身体を遠慮なく舐め回し、啜った。
ジュルルルル…ズンズン…レロツツ…ヌチャヤ
音を立てて局部を舐められる経験など、杏〇の
記憶上には無かった。
しかし、慣れない経験にも関わらず杏〇の膣からは
蜜が次から次へと溢れ出した。



REC



男たちによる杏○の味見は続く。
「キスをお願いされたり、それにも応じて
あげてください」
「んむ〜んむ〜」
「もつと〜んむ〜唾液をいただけますか」
杏○が生きてきてほとんど聞く機会など
無い言葉だが、おとなしく従うほかない。

HD

AUTO

REC



男たちによる杏〇の味見は続く。
「キスをお願いされたり、それにも応じて
あげてください」
「んんんん」
「もつとんんん、唾液をいただけますか」
杏〇が生きてきてほとんど聞く機会など
無い言葉だが、おとなしく従うほかない。

HD
AUTO

REC



「オシッコを飲ませて欲しいというお客様が
いらつしやうたら!」
「そんなのいるのか?」
「もしものために練習しまじょうか」
「あ、ああ」
杏〇は男の顔に跨るよう促され、その回の中へ
放尿した。
男はゴクゴクと喉を鳴らし、杏〇のものを飲み干した。

HD
AUTO



REC



「オシッコを飲ませて欲しいというお客様が
いらつしやったら!」
「そんなのいるのが...?」
「もしものために練習しまじょうか」
「あ、ああ」
杏〇は男の顔に跨るよう促され、その回の中へ
放尿した。
男はゴクゴクと喉を鳴らし、杏〇のものを飲み干した。

HD
AUTO



「オモチャを使ってみたい」という
お客様がいたら」
「オモ……チャ？」
杏〇は何のことやらと首を傾げるが
男はバイブ取り出し、杏〇の膣内へと
押し込んだ。
「あっ、あっ！」
「あっ、あっ！」
バイブのひだが杏〇の膣壁をつかまえ
分泌される体液がかき出されて床の絨毯に
染みを作った。

「オモチャを使ってみたい」という
お客様がいたら」
「オモ……チャ？」
杏〇は何のことやらと首を傾げるが
男はバイブ取り出し、杏〇の膣内へと
押し込んだ。
「あっ、あっ！」
バイブのひだが杏〇の膣壁をつかまえ
分泌される体液がかき出されて床の絨毯に
染みを作った。

REC



「チンポを舐めてほしいと言われたら」
「舐める…のか？」
「わかつてるじゃないですか、とても良いですよ」
杏◎は男のモノを懸命に舐め、男も杏◎の
局部を舐め回した。
男は杏◎の局部に顔を押し付け、それを堪能した。

HD
AUTO



「チンポを舐めてほしいと言われたら」「舐める…のか?」「わかつてるじゃないですか、とても良いですよ」杏◎は男のモノを懸命に舐め、男も杏◎の局部を舐め回した。男は杏◎の局部に顔を押し付け、それを堪能した。

HD
AUTO



REC



「排尿を見せてほしいと言われたら
見せてあげてください」
「今度は見せるのか」
「先ほど飲み物に利尿剤を混ぜておきましたので
そろそろしたくなってくるんじゃないですか？」
「そういえば、先ほど排尿したにも関わらず
杏〇の膀胱にはもう尿が満たされたのが
わかった。尿道を刺激すると、勢いよく尿が
噴き出した。」

HD
AUTO

REC



「排尿を見せてほしいと言われたら
見せてあげてください」
「今度は見せるのか」
「先ほど飲み物に利尿剤を混ぜておきましたので
そろそろしたくなってくるんじゃないですか？」
「そういえば、先ほど排尿したにも関わらず
杏〇の膀胱にはもう尿が満たされたのが
わかった。尿道を刺激すると、勢いよく尿が
噴き出した。」

HD
AUTO

REC



顔面騎乗を要求され、男の顔に跨る杏。口では男たちの陰茎への奉仕をさせられた。やり方がわからないなりに懸命に肉棒を舐め、男たちは遠慮なしに口内へ精液を流し込み続ける。「さちんと飲んでくださいねー」

HD
AUTO

REC



顔面騎乗を要求され、男の顔に跨る杏。口では男たちの陰茎への奉仕をさせられた。やり方がわからないなりに懸命に肉棒を舐め、男たちは遠慮なしに口内へ精液を流し込み続ける。「さちんと飲んでくださいねー」

HD

AUTO

「我々の精液をいっぱい味わってもらいましょうか」
男たちは杏〇の掌に精液を大量に出し、それを
杏〇に嚙らせた。
「おいしいですか？」
「ん〜ん〜ん〜飲みにくい〜」
ジュル：ジュル：と音を立てながら、杏〇はゆっくと
それを飲み干した。

「膣の具合を聞かれたら、素直に使わせるように」
 そう言つて男は、ぐちよぐちよに濡れた杏〇の膣の
 穴に自分の陰茎を突き入れた。
 「口が空いでいたら、なるべく別の人のモノも奉仕
 してあげてくださいいね」
 「んっんっんっ！」
 杏〇はおとなしく男の精液を膣内に受け入れ続けた。

「膣の具合を聞かれたら、素直に使わせるように」
そう言つて男は、ぐちよぐちよに濡れた杏〇の膣の
穴に自分の陰茎を突き入れた。
「口が空いていたら、なるべく別の人のモノも奉仕
してあげてくださいいね」
「んっんっんっ！」
杏〇はおとなしく男の精液を膣内に受け入れ続けた。

臍と尻穴に同時に男たちの肉棒を挿入された杏◎。
「ちよつと...苦しい...はあ...はあ...」
杏◎は苦しがるが男たちは勝手を知るように
気にせず肉棒の出し入れを続けた。
「こんどん良くなるから大丈夫だよ、特に君は」
ただ励まされているのか、それとも...
しかし杏◎にはそんなことを考える余裕はなかった。

膣と尻穴に同時に男たちの肉棒を挿入された杏◎。
「ちよつと...苦しい...はあ...はあ...」
杏◎は苦しがるが男たちは勝手を知るように
気にせず肉棒の出し入れを続けた。
「こんどん良くなるから大丈夫だよ、特に君は」
ただ励まされているのか、それとも...
しかし杏◎にはそんなことを考える余裕はなかった。



電動マッサージ機を股間に押し付けられる杏○。
「オモチャの種類も色々あるからね、何が出てきても
きちんと対応するように」
「うっ……うっ……うっ……うっ……！」
杏○の膣から粘性の体液が次々流れ出し、床にも
男たちにもその匂いを染みつかせる。



HD
AUTO

電動マッサージ機を股間に押し付けられる杏○。
「オモチャの種類も色々あるからね、何が出てきても
きちんと対応するように」
「うっ……うっ……うっ……うっ……！」
杏○の膣から粘性の体液が次々流れ出し、床にも
男たちにもその匂いを染みつかせる。



HD
AUTO

● REC



「精液便所になる練習もしておこうね」
拘束具によつて身動きが取れない杏○を
数人の男たちが代わる代わるに犯していく。
「はあ...はあ...はあ...」
杏○はずいぶんと疲れた様子を見せていたが
男たちは構わず杏○の穴を攻め続けた。

HD
AUTO

「お客様に記念撮影を求められたら、快く応じてくださいわね」
 「ほらピースして」
 前後の穴にオモチャを入れられ、穴の拡張がされていた。
 そしてすでに、杏〇の意識は無いに等しい状態だった。

「腹減ったな...」
 面倒な研修会は終わった。覚えていないが、彼女は食事を求めて、日常へと戻っていくのであった。
 次に杏〇が気付いた時、出張のために予約していたビジネスホテルの二室にいた。そして日付も変わっており、すでに朝だった。研修会では何をやってたのかまるで思い出せないが、杏〇にとってそんなことは些細な問題であった。



HD
 AUTO

「お客様に記念撮影を求められたら、快く応じてくださいね」
 「ほらピースして」
 前後の穴にオモチャを入れられ、穴の拡張がされていた。
 そしてすでに、杏〇の意識は無いに等しい状態だった。

「腹減ったな...」
 面倒な研修会は終わった。覚えていないが、彼女は食事を求めて、日常へと戻っていくのであった。

次に杏〇が気付いた時、出張のために予約していたビジネスホテルの二室にいた。そして日付も変わっており、すでに朝だった。研修会では何をやってたのかまるで思い出せないが、杏〇にとってそんなことは些細な問題であった。



HD
 AUTO

REC



「腹が減るんだから仕方ないだろ！」
「でも君が食べてるのはお店の……」
杏◎の普段の暴食具合に危機感を持った数人の幹部が
杏◎を叱責するが、うちが明かない。
最終手段として、催眠術を用いて杏◎の食欲を減らせれば
という提案がなされた。
半信半疑な杏◎だが、それで解決するならと従うことに。
精神構造が単純な杏◎はいとも簡単に催眠術にかかった。
しかし幹部たちには、実のところ別の目的があった。

日々のほとんど食料を消費していた杏◎のもとへ
各店の店長を集めて研修会をやるという連絡が入った。
そして出張として研修会場へと赴いた杏◎だったが
何故か彼女だけ別室へと案内されることに。

HD

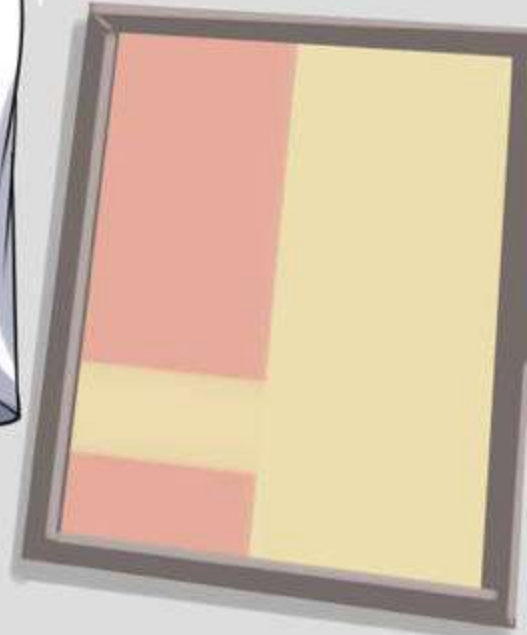
AUTO

「それじゃあ接客の基本を教えていくよ」
「あ、ああ」
杏〇は、男たちの言葉が全て正しいことであると
思いこむ催眠にかかっていた。
深層の部分では何か恥ずかしいことをやらされて
いる意識があつたが、今の杏〇には何が恥ずかしい
のかもわからない。
「お客様に下着を見せてほしいと言われたら、素直に
従うようにね」
「わかっただ」



HD

AUTO



「それじゃあ接客の基本を教えていくよ」
「あ、ああ」
杏〇は、男たちの言葉が全て正しいことであると
思いこむ催眠にかかっていた。
深層の部分では何か恥ずかしいことをやらされて
いる意識があつたが、今の杏〇には何が恥ずかしい
のかもわからない。
「お客様に下着を見せてほしいと言われたら、素直に
従うようにね」
「わかっただ」



HD
AUTO



「味見をお願いされたら、快くお受けするようだよ」
「んっ…あ、ああ」
男たちは杏〇の身体を遠慮なく舐め回し、啜った。
ジュルルルル…ズンズン…レロツツ…ヌチャヤ
音を立てて局部を舐められる経験など、杏〇の
記憶上には無かった。
しかし、慣れない経験にも関わらず杏〇の膣からは
蜜が次から次へと溢れ出した。



「味見をお願いされたら、快くお受けするようだよ」
「んっ…あ、ああ」
男たちは杏〇の身体を遠慮なく舐め回し、啜った。
ジュルルルル…ズンズン…レロツツ…ヌチャヤ
音を立てて局部を舐められる経験など、杏〇の
記憶上には無かった。
しかし、慣れない経験にも関わらず杏〇の膣からは
蜜が次から次へと溢れ出した。

HD
AUTO



REC



男たちによる杏○の味見は続く。
「キスをお願いされたり、それにも応じて
あげてください」
「んむ〜んむ〜」
「もつと〜んむ〜唾液をいただけますか」
杏○が生きてきてほとんど聞く機会など
無い言葉だが、おとなしく従うほかない。

HD
AUTO

REC



男たちによる杏○の味見は続く。
「キスをお願いされたり、それにも応じて
あげてください」
「んむ……んむ」
「もつと……んむ、唾液をいただけますか」
杏○が生きてきてほとんど聞く機会など
無い言葉だが、おとなしく従うほかない。

HD

AUTO

REC



「オシッコを飲ませて欲しいというお客様が
いらつしやうたら!」
「そんなのいるのが...?」
「もしものために練習しましょうか」
「あ、ああ」
杏〇は男の顔に跨るよう促され、その回の中へ
放尿した。
男はゴクゴクと喉を鳴らし、杏〇のものを飲み干した。

HD
AUTO



REC



「オシッコを飲ませて欲しいというお客様が
いらつしやうたら!」
「そんなのいるのが...?」
「もしものために練習しまじょうか」
「あ、ああ」
杏〇は男の顔に跨るよう促され、その回の中へ
放尿した。
男はゴクゴクと喉を鳴らし、杏〇のものを飲み干した。

HD
AUTO



「オモチャを使ってみたいの、というお客様がいたり」
「オモ...:チャ?」
杏〇は何のことやらと首を傾げるが男はバイブ取り出し、杏〇の膣内へと押し込んだ。
「あっ!」
「あっ!」
バイブのひだが杏〇の膣壁をつかまえ分泌される体液がかき出されて床の絨毯に染みを作った。

「オモチャを使ってみたい」という
お客様がいたら」
「オモ……チャ？」
杏〇は何のことやらと首を傾げるが
男はバイブ取り出し、杏〇の膣内へと
押し込んだ。
「あっ、あっ！」
バイブのひだが杏〇の膣壁をつかまえ
分泌される体液がかき出されて床の絨毯に
染みを作った。

REC



「チンポを舐めてほしいと言われたら」
「舐める…のか？」
「わかつてるじゃないですか、とても良いですよ」
杏◎は男のモノを懸命に舐め、男も杏◎の
局部を舐め回した。
男は杏◎の局部に顔を押し付け、それを堪能した。

HD

AUTO



REC



「チンポを舐めてほしいと言われたら」「舐める…のか?」「わかつてるじゃないですか、とても良いですよ」杏◎は男のモノを懸命に舐め、男も杏◎の局部を舐め回した。男は杏◎の局部に顔を押し付け、それを堪能した。

HD

AUTO



REC



「排尿を見せてほしいと言われたら
見せてあげてください」
「今度は見せるのか」
「先ほど飲み物に利尿剤を混ぜておきましたので
そろそろしたくなってくるんじゃないですか？」
「そういえば、先ほど排尿したにも関わらず
杏〇の膀胱にはもう尿が満たされたのが
わかった。尿道を刺激すると、勢いよく尿が
噴き出した。」

HD
AUTO

REC



「排尿を見せてほしいと言われたら
見せてあげてください」
「今度は見せるのか」
「先ほど飲み物に利尿剤を混ぜておきましたので
そろそろしたくなってくるんじゃないですか？」
「そういえば、先ほど排尿したにも関わらず
杏〇の膀胱にはもう尿が満たされたのが
わかった。尿道を刺激すると、勢いよく尿が
噴き出した。」

HD
AUTO

REC



顔面騎乗を要求され、男の顔に跨る杏。口では男たちの陰茎への奉仕をさせられた。やり方がわからないなりに懸命に肉棒を舐め、男たちは遠慮なしに口内へ精液を流し込み続ける。「さちんと飲んでくださいねー」

HD

AUTO

REC



顔面騎乗を要求され、男の顔に跨る杏。口では男たちの陰茎への奉仕をさせられた。やり方がわからないなりに懸命に肉棒を舐め、男たちは遠慮なしに口内へ精液を流し込み続ける。「さちんと飲んでくださいねー」

HD

AUTO

REC



「我々の精液をいっぱい味わってもらいましょうか」
男たちは杏〇の掌に精液を大量に出し、それを
杏〇に囁かせた。
「おいしいですか？」
「ん〜ん〜ん〜飲みにくい〜な」
ジュル：ジュル：と音を立てながら、杏〇はゆっくりと
それを飲み干した。

HD
AUTO

REC



「膣の具合を聞かれたら、素直に使わせるように」
そう言つて男は、ぐちよぐちよに濡れた杏〇の膣の
穴に自分の陰茎を突き入れた。
「口が空いでいたら、なるべく別の人のモノも奉仕
してあげてくださいいなね」
「んっんっんっんっ！」
杏〇はおとなしく男の精液を膣内に受け入れ続けた。

HD
AUTO

膣と尻穴に同時に男たちの肉棒を挿入された杏◎。
「ちよつと...苦しい...はあ...はあ...」
杏◎は苦しがるが男たちは勝手を知るように
気にせず肉棒の出し入れを続けた。
「こんどん良くなるから大丈夫だよ、特に君は」
ただ励まされているのか、それとも...
しかし杏◎にはそんなことを考える余裕はなかった。



臍と尻穴に同時に男たちの肉棒を挿入された杏◎。
「ちよつと...苦しい...はあ...はあ...」
杏◎は苦しがるが男たちは勝手を知るように
気にせず肉棒の出し入れを続けた。
「こんどん良くなるから大丈夫だよ、特に君は」
ただ励まされているのか、それとも...
しかし杏◎にはそんなことを考える余裕はなかった。



電動マッサージ機を股間に押し付けられる杏○。
「オモチャの種類も色々あるからね、何が出てきても
きちんと対応するように!」
「うっ……うっ……うっ……!」
杏○の膣から粘性の体液が次々流れ出し、床にも
男たちにもその匂いを染みつかせる。



HD
AUTO

電動マッサージ機を股間に押し付けられる杏○。
「オモチャの種類も色々あるからね、何が出てきても
きちんと対応するように」
「うっ……うっ……うっ……うっ……！」
杏○の膣から粘性の体液が次々流れ出し、床にも
男たちにもその匂いを染みつかせる。

HD
AUTO



「お客様に記念撮影を求められたら、快く応じてくださいね」
 「ほらピースして!!」
 前後の穴にオモチャを入れられ、穴の拡張がされていた。
 そしてすでに、杏〇の意識は無いに等しい状態だった。

「腹減ったな...」
 面倒な研修会は終わった。覚えていないが、彼女は食事を求めて、日常へと戻っていくのであった。
 次に杏〇が気付いた時、出張のために予約していたビジネスホテルの二室にいた。そして日付も変わっており、すでに朝だった。研修会では何をやってたのかまるで思い出せないが、杏〇にとってそんなことは些細な問題であった。



HD
 AUTO

「お客様に記念撮影を求められたら、快く応じてくださいね」
 「ほらピースして」
 前後の穴にオモチャを入れられ、穴の拡張がされていた。
 そしてすでに、杏〇の意識は無いに等しい状態だった。

「腹減ったな...」
 面倒な研修会は終わった。覚えていないが、彼女は食事を求めて、日常へと戻っていくのであった。
 次に杏〇が気付いた時、出張のために予約していたビジネスホテルの二室にいた。そして日付も変わっており、すでに朝だった。研修会では何をやってたのかまるで思い出せないが、杏〇にとってそんなことは些細な問題であった。



HD
 AUTO



REC



HD
AUTO



REC



HD
AUTO





REC



HD
AUTO





REC



HD
AUTO

REC



HD
AUTO





REC



HD
AUTO

REC



HD
AUTO





REC



HD

AUTO

REC



HD

AUTO





REC



HD

AUTO

REC



HD

AUTO





REC



HD
AUTO

REC



HD
AUTO







REC



HD
AUTO



REC



HD
AUTO







REC



HD
AUTO



REC



HD
AUTO







REC



HD
AUTO



REC



HD
AUTO





● REC



HD
AUTO



REC



HD
AUTO





REC



HD
AUTO

REC



HD
AUTO





REC



HD
AUTO



REC



HD
AUTO







REC



HD
AUTO

REC



HD
AUTO





REC



HD
AUTO

REC



HD
AUTO





REC



HD
AUTO



REC



HD
AUTO







REC



HD
AUTO



REC



HD
AUTO







REC



HD

AUTO

REC



HD
AUTO







REC



HD

AUTO

REC



HD
AUTO





REC



HD
AUTO



REC



HD
AUTO







REC



HD
AUTO



REC



HD
AUTO







REC



HD
AUTO

REC



HD
AUTO





REC



HD
AUTO

REC



HD
AUTO





REC



HD
AUTO

REC



HD
AUTO





REC



HD
AUTO



REC



HD
AUTO





正正正
正正正
正正正
正正正

正正正
正正正
正正正
正正正



正正正
正正正
正正正
正正正

正正正
正正正
正正正
正正正

REC



HD
AUTO

REC



HD
AUTO



正正正
正正正
正正正
正正正

正正正
正正正
正正正
正正正



REC



HD
AUTO

